

徳永直の会会報

第63号

この道は…

会長 高木陽助

二〇一三年十二月六日は、一九四一年十二月八日と共に記憶すべき日となった。「特定秘密保護法」が自民、公明両党の賛成多数で可決、成立したのである。「秘密の範囲を際限なく広げ、官僚や政治家の都合のいいように秘密を指定でき、さらに秘密を扱う人たちのプライバシーの把握は家族にまで及び、秘密の指定を監視する独立した機関もない」という危険きわまる悪法である。

政府は「国際情勢の複雑化に伴い我が国及び国民の安全の確保」のためにこの法律が必要だと言っているのであるが、はたしてそうであるか。この法律案が衆議院で審議されるようになってから、多方面の文化人、学者、芸術家、報道関係者などから反対の意見が出され、連日国会を囲む抗議デモも行われてきた。にもかかわらず、参議院では二十三時間という超異例の短時間の審議の後に、採決が強行された。なぜ、そこまでして成立を急ぐ必要があるのか。

戦前に「治安維持法」があった。一九二五（大正一四）年に公布され、一九二八年に改正、さらに一九四一年には大幅に改正された。

目次

- ・この道は… 高木陽助 … p 1
- ・「針生一郎 いま、芸術&文学を語る」
— 徳永直について — … p 2
- ・「杉野健一さんを偲ぶ会」報告 … p 3
- ・徳永直文学散歩⑧ … p 5
- ・平成25年度会計中間報告 … p 7
- ・「第37回孟宗忌」案内 … p 7
- ・お知らせ … p 8

主として共産主義活動の抑圧策として違反者には極刑主義を採り、言論・思想の自由を蹂躪した。解釈の幅も広がり、政府批判はすべて弾圧の対象となったとんでもない悪法だ。

一九三三（昭和八）年二月二十日、特高警察に逮捕された小林多喜二は、築地警察署内で取り調べを受けた。寒中丸裸にされ、スツッキでメツタ打ちされるといふ拷問を受け、搬送された病院で亡くなった。遺族に返された多喜二の全身は、拷問によって異常に腫れ上がり、特に下半身は内出血でどす黒く腫れ上がっていたとある。

このことを身近に見聞きした徳永直（当時三十四歳）の衝撃は、推して知るべし。直には護るべき妻も子もある。この年の九月、「創作方法上の新転換」を『中央公論』に発表し、渡辺順三とともに「日本プロレタリア作家同盟」を脱退している。十二月、家族を連れて「死にめにも逢えなかつた母親の一周忌と残っている老父を妹夫婦に頼むこと」や「いろいろ貧乏長男としての後始末など」のために、一カ月ほど郷里の熊本市黒髪へ帰省している。『冬枯れ』に

よる)

熊本時代の友人幾田君は永く監獄に入ったあげく亡くなり、庄屋の息子のF君も警察に引つ張られたという。『冬枯れ』によると鷺尾は『合法的人物』で法律に触れてる訳でもなんでもなかった」のに、帰郷するとすぐ警察にハガキを出している。すぐ警察がやって来て家の中を覗き込む。「何しろ、君アこの土地じゃその方の草分けだからな」という言葉が鷺尾の胸の中を鋭く抉る。M君と立田山の方へ行つた時も、常に警察に監視されている自分を意識する。そのためもあつてか「神経衰弱がひどくなり」、「とめどない焦らだち」を覚え、「シンは疲れきっている感じ」で、「休息する場所を探し歩いている」が「結局はどこにもそんな場所は見当らない」。

電車の車掌だったN君は三・一五の被告になり、百舌鳥のような奇声を発する狂人となっている。鷺尾は益々ひどい強迫観念に襲われる。『冬枯れ』の解釈は置いとくことにして、作家である鷺尾をそこまで追い込んでいるのは、「治安維持法」である。

「針生一郎 いま、芸術&文学を語る」 — 徳永直について —

針生 一郎

徳永直は熊本で印刷工などをしているときに、熊本の旧制五高の「新人会」というのに属していた林房雄と付き合いがあった。当時「新人会」から共産党に入るのが常道だったが、林房雄は右翼的偏向と言われているので誰も彼を共産党に誘おうとはしなかった。それで

徳永直をプロレタリア文学と結びつけて、『太陽のない街』という凸版印刷の第二争議を徳永に書かせたのは林房雄であるが、林房雄との関係でいったら、必ずしも徳永直にとっては幸福なものではなかった。

プロレタリア文学そのものが、政治の優位性とかレーニン主義的段階とか言つて非常に突つ走つていて、宮本顕治と小林多喜二の二人だけが地下の共産党を構成していたが、彼等が無謀な反戦ストライキを呼びかけさせるピラを配れという指令を出した。徳永直はそのような極左封建主義的みたいなものを嫌つて、『太陽のない街』を絶版にしたり、プロレタリアリズムではなくて、自然主義と見まがうような井原西鶴的なリアリズムに退いている。そういう徳永の後退、つまり処女作『太陽のない街』が最高であつて、プロレタリア文学としてはあとの作品は『太陽のない街』にはかなわない、と言われている。

しかし、反面そういうパンドラのような、人物について類型的な表現に飽き足りなくて、そこから脱却しようとした。そして、西鶴的、あるいは自然主義リアリズムや、有島武郎なんかに傾倒することとはなかったと思うが、有島武郎がプロポトキンから汲み取った「相互扶助なくして資本主義の文化的な生産はありえない」というところに腰を落ちつかせて、戦争礼賛、国策教育の方向には決していかなかった。その面ではひとかどの人物だと思つてゐる。

私は何度も徳永直にあつたが、理論としては「労働作家が必要だ、そして労働作家はイデオロギーで感じたことを書くのではなくて、文学そのものの本質を見つめて描かなければならない」という単純な理論に感動した覚えはなかった。しかし、とくに『妻よねむれ』

は看護婦をしていた宮城県北部の登米町の貧農の娘、両親がいなくなつてそのお婆さんに育てられ、看護学校を出て、自分が結婚するときはお婆さんも一緒につれていきたいという、そういう条件に徳永の見合いが合致していたので、お婆さんも一緒に住みつくことになつた。そして何度も東北に買い出しに出たりして、貧しいのは熊本だけではないのだ、東北の農村ももつと貧しい、それで相互に助け合う生活が必要だと痛感する。しかし、結婚生活はかなり幸せな充実した生活でもあつた。戦中・戦後のそういう家庭を描いた作品が、理論的に尖鋭だとは思わないが、作品としての成熟度を示している、なかなか読ませるいい作品だと思う。『静かなる山々』は労働の結合を描いたもので、中部日本を舞台とする長編です。戦後に書かれたプロレタリア文学の成熟を示す一つの傑作だと思つていいと思う。

徳永については、今回熊本で出版された二冊の本を読んで、私は大いに認識を新たにし、収穫があつたと思つている。(文責高木)

*これは二〇一〇年二月二十八日、熊本市の「セカンドハウス」で開かれた針生一郎氏(この年の五月死去)の講演会で語られたものである。

「杉野健一さんを偲ぶ会」報告

昨年(二〇一三年)十一月十一日、「杉野健一さんを偲ぶ会」を開いた。「熊本・徳永直の会」が発足した当時の会員で、徳永直の会には物心両面で幾知れぬ貢献をされていた。(会報六十一号

に詳しく記載)その杉野健一(本名林敦)さんの一周忌に御霊を慰めたいと思つたからである。熊本民主文学の方々にも賛同を得て、共催という形で実施し、二十一名の参加者があつた。嬉しいことにご長男の林歩氏にも参加いただいた。偲ぶ会の次第は次の通り。



梶原定義氏による略歴紹介

一、開会

二、黙祷・献酒

三、杉野さんを偲ぶ

①友人の梶原定義氏に杉野健一さんの略歴、

②徳永直の会前会長の中村青史氏に杉野健一さんの主に「徳永直の会」における功績、

③友人の千葉昌秋氏に杉野健一さんの思

い出などを、エピソードなどを交えながら語っていただいた。

四、杉野健一さんの詩の朗読

①「肥後鯉ひとつ」(中村青史氏)

②「江津湖畔にて」(高木陽助氏)

③「献詩・立田の杜に」(高木陽助氏)

④「くじらの挨拶」(下城正臣氏)

五、長男林歩氏より御礼の挨拶

*林氏は、自分の知らない若き日の文学青年であった父親、「徳永直の会」や「熊本民主文学」等で活躍されていた父親像を今回初めて知り、感慨深い様子であった。

六、会食

杉野健一さんを偲びながら：献杯
*参加いただいた方々、ありがとうございました。



長男 林歩氏による御礼の挨拶

説明はこれまでだ
執筆者よ 歛取をしたことがあるか

肥後鋏ひとつ

杉野 健一

「木製部と鉄製刃の組合せでできている風呂鋏の一種。木製の風呂に四角形の柄つぼを彫って木製の柄が付いている。田畑の耕起に使われ、土地条件によって刃幅が異なっている。」

「熊本県大百科事典」より

一畝にどれだけの汗が滴り 腰が痛むか
永い忍従の小作農民たちの歯噛み 脂汗
肥後鋏は田畑に這いつくばらせ
鞭打つ徒刑の農具だった

やつと伸ばした手足の軋に
焼火箸で流しこむ膏薬の匂いを嗅いだことはないか
おゝそしてそのまゝくの字に曲ったいくたり
かの年寄りたちを見なかつたか

ここに使い古された肥後鋏がある

祖父母たちがおやじに遺したものだ
刃先は円錐形になり尖り錆びている

明治三十四年 玉名郡江田村

菊池川はゆるやかに流れ

借金で離散の筏は僅かの家財と不安とのせてゆ
らりと揺れ

祖父母と長兄たちは万田抗へ

次男はブラジルへ行つちまい

三男は横島干拓へ

おやじは遠縁を頼って百貫港へたどりつく
十六才だったという

染め物職人となった

何とつゝましく清々しい背中だったろう

おふくろは子宮癌で五年寝たきりだった
 今際に蟹を喰いたいといった
 おやじは唐薯のつき揚げを喰いたいといった
 喉頭癌だった

おふくろが死んで三十年

おやじが死んで二十年

いまは一族の消息はない

思えばこの歟は苦難をわれらと共にした

防空壕掘りに活躍し

熊本大空襲にもしぶとく焼けのこり

焼跡の唐薯づくりや

六・二六水害の泥土排土にも精出した

人生には辛いこともあるだろう

だけど息子よわれら無産流民の末裔ぞ

この肥後歟を一篇の詩をそえて

子どもたちと孫達におくろう

民主なる地方と民主なる国に

いきるであろう きみらに



中村青史氏による詩の朗読

徳永直文学散歩⑧

緒方 宏章

『冬枯れ』

「何だ、M君じゃないか」

「ええ、久闊でした……」

ひどく痩せて、ながく

なつた顔を窓ぎわへおっ

つけて、M君は微笑した

が、すぐ「二寸」という

様子をしてみせて、田圃

の方へ離れていった。

鷲尾もマントをひつか

けると、裏口から田圃へ出ていって、

人目の少ない土堤で一緒にな

りながら、それから 麓道を龍田山の方へ歩き出した。――

「君ア、大丈夫だったのかい？」

「は、わしア去年の夏から、ザツと寝込んだりしましたけん……」

M君は標準語と土地言葉をチャンポンしながら、自嘲を交ぜたこ

の土地人らしい豪傑風なわらい方をした。

彼は東京のH大学の文科にいたころから、演劇サークル員だった

が、二年前肺を悪くして郷里にかえり、それからザツと文化団体支

部員で働いていたのだ。

「大変だったらしいね」

鷺尾が云うと、相手はこけた頬骨を尖らせて遮るように、

「いや、まだポツポツあるんですよ」

と云った。

道々、M君の昂奮したふるえを帯びた言葉を、とぎれとぎれにきいても、それが……：……：……ののだということがわかった。それはまるで……：……：……と云った感じだった。

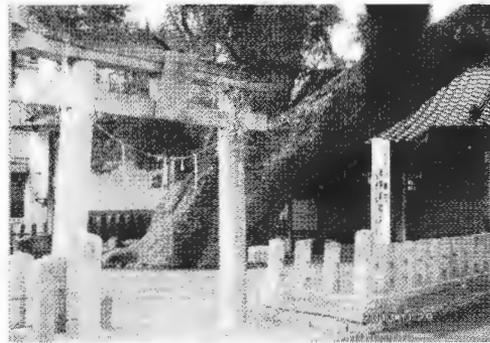
「もつとも、もう大分出てきた連中も居りますが……：……」

M君は、風をくらうと、暫くは激しく咳きこんだ。その癖、どこか家の中か、木陰に入ろうと云っても諾かなかつた。何かに追ったけられてるように山道をのぼりながら、激しくくと凹んだ眼が怖えたように光った。

気がつくくと、私達はいつの間にか、龍田山の頂上まで来てしまっていた。低い山ではあるが、鷺尾の家から小一里はあつたろう。少しばかり平地になったところが小公園風に出来ていて、そこからこ



立田山から黒髪界限・熊本市街を臨む



近くの若宮神社

の農業都市の、樹木の多い熊本市街がひとめに展らけていた。
母親の一周忌で帰郷した鷺尾が、M君に呼ばれて龍田山を歩きながら話している場面である。彼の背後には監視の目が光っていた。

「徳永直文学選集」より



立田山の山中

第三十七回「孟宗忌」のご案内

二〇一四年二月十五日(土) 午後一時半より

第一部 「碑前祭」：午後一時半より

場所：徳永直文学碑前(泰勝寺入り口)

① 開会

② 黙祷

③ 献酒

④ 献花

⑤ メッセージ披露

⑥ 経過報告

⑦ 諸連絡

第二部 「徳永直作品朗読会」：午後二時半より

場所：熊本大学「くすの木会館」

① 徳永直作品朗読会(約八〇分)

『冬枯れ』(一九三四年〓昭和九年)

・ 解説：中村青史先生

・ 朗読：熊本朗読研究会(CDに録音)

② 懇親会：午後四時〜午後六時(会費三〇〇〇円)

2013年度 会計中間報告

(2013年4月~12月)

収 入		支 出	
繰越金	58,333	事務費	0
会費(32人)	64,000	通信費	24,720
利子	12	総会関連費	1,600
寄付	4,000	熊本文化振興会年会費	20,000
偲ぶ会残金	2,000	HP関連費	2,510
		会報発行費	0
		賛助金	5,000
収入合計	128,345	支出合計	53,830
		残金	74,515



第36回「孟宗記」の様子

お知らせ

① 会員募集について

会員を募集しています。お知り合いがいらっしゃいましたら、ご紹介ください。また、会員募集のためのアイデアがありましたら、お知らせください。

② 「徳永直ホームページ」について

ついにアクセス回数が、千回を超えました。多くの方がもっとアクセスして楽しめるよう今後も工夫していきたいと考えています。ご協力をお願いします。

③ 「会費納入」について

今年度会費の未納の方、会費の納入お願い致します。

④ 編集後記

・「特定秘密保護法」等には目を光らせて監視しましょう。会員の皆様のご意見を載せたいと思っています。どうぞご寄稿下さい。
・今年「徳永文学」を読み返す年にしたいものです。感想文をお寄せ下さい。